

---

# 宝玉の魔術師

騎竜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

宝玉の魔術師

### 【Nコード】

N4769C

### 【作者名】

騎竜

### 【あらすじ】

『宝玉』それは強大な魔力を秘めた魔石。宝玉の“契約者”は様々な因果で結ばれている。それと同時に、逸史に葬られた化け物も因果と結ばれる。そして今、けっして歴史に語られぬ逸史の中で、因果に彷徨える者達の戦いが始まる。

## 第1話『永き1日の始まり』

《昔から、石には不思議な力が宿ると云われる。それはあながちはずれおらず、特に魔術界においては魔石と称されている。》

力、即ち魔力が弱い魔術師は、宝石、水晶、化石等に宿った魔力を使用し、魔術の威力や効果を高めたりする。

そして、その石の中でも桁違いに魔力を秘めた石を“宝玉”と呼ぶ。石自体の種類、例えば黒いダイヤモンド等の、普通では有り得ない輝き、または色をしたものに強大な魔力が宿る。“宝玉”は一つの種類に一つしかなく、初めから形がきまっているので削るなどの加工はできないが、持ち主との契約時のみ、自由に形状を変えることができる。

以上、魔石と“宝玉”に関する記録《》

「“宝玉”、か……」

少年は、呟きながら自分の首に掛かっているペンダントに目をやる。

先端に本来有り得ないはずの、黒く透き通った玉髓がはめ込まれている。器を深い青紫の水晶で精巧に型どり、純銀の鎖に結ばれたそれは一目見ただけで分かる最上級の首飾りだった。

実際、売れば数千億はする国宝級の代物だが。

「ん？もうこんな時間か」

時計を見ればすでに八時。普段なら学校へ行く支度をしているところだった。

急がねば、と思いつつも、普段のスケジュールから少しづつ時間をずらし微調整する。

(……よし。まずは朝飯からだ)

こうして、黒鉄竜牙の長い1日が幕を開けた。

黒鉄竜牙の父、黒鉄将龍は財政界、魔術界でも一目置かれていた存在だ。

財政界では、総員15人の会社をたつた二年で大企業に変え、財閥すら上回る独占企業家となった。

魔術界では、他に類をみない才能を發揮し、独創的な剣術と体術、そこに魔術を加えた新しい流派を作り出した。

しかし、偉大な魔術師も、尊大な企業家も病気には勝てなかった。原因は悪性腫瘍つまり癌。それが分かったのは五年前だが、そのことは息子の竜牙にすら伝えていなかった。

(一体どうしてだ?)

竜牙は頭にある父親のデータを引き出し、整理していた。

朝食の真つ最中に。

「竜牙様。今日の朝食、お口に合いませんでしたか?」  
考え事をしている竜牙に気づいた給仕の真宮椿は、自分の作った朝食を見ながら聞く。

「どうやら手が止まっていたらしい。食事自体はいつも通り旨いで、きちんと否定しておく」「いや、ちよつと考え事をしてただけだ」  
そうですか、と再び食事に戻る椿。

給仕ではあるが、椿は竜牙と同じ歳の従兄弟だ。母親の兄、竜牙にとつての伯父が

「あの家に一人で住むのは何かと不便だろ?うちの娘だったら、給仕として申し分ないし、ちよつと学校も同じだしな」

とかなんとか言つて、半無理やり同居する事になってしまったのだ。

椿は椿で

「私で宜しかつたら。ただ、一応給仕という事なので竜牙様と呼ばせて頂きますよ」  
てな感じである。

(かなり可愛いし、料理もうまいし、有り難いことはこの上ないん

だけど)

本心はそう思う竜牙であった。

椿に気付かれないように苦笑しながら、サクサク、と箸を進める。普通に食べればもの一分とかわらなかつた。

即座に皿を片付け、洗いにかかる椿、と俺。

「あ、竜牙様！！家事は私がー」

「駄目だ。遅刻はまずいだろ？」

「……っ！！あ、ありがとうございます」

椿は隠しきれず浮かんでしまった嬉しさのため動揺する。

(……………?)

ただ、鈍感な竜牙には、まったく意味が分からなかつた。

第1話『永き1日の始まり』（後書き）

初投稿なので、あまり上手くないと思います。  
それでも読んでくれた方々、深く感謝いたします。

## 第二話『永き1日の日常編』

闇に満ちる世界。

感覚はまどろみ、体は鉛のように重い。

ここは竜牙の意識の世界だ。俗に言う夢だが、魔力で意識を固定し、睡眠をとりながらも起きている状態になっている。

魔術師なら誰でもできる。ただ、その世界は様々で同じものは存在しないという。

竜牙の場合、世界は果てしなく広がる闇だった。

いや、果てしなく広がる闇、というのはおかしいな。周り全てが闇だったら奥行きなど分かるわけがない。

(それでも、そう感じる)

普通は、時間の流れを感じないここで魔力を集中して練り上げるとか魔術の構成などをする。

だが作業を始める前に闇は、一瞬で純白の世界に塗り替えられた。誰かが自分の意識に干渉したらしい。

竜牙の目の前には、おそらく本人であろう干渉者の少女が立っていた。

竜牙は単刀直入に尋ねる。

「誰だ？」

「……………」

少女は答えない。

意識の世界だから宛にはならないが、一応着ているのは自分と同じ高校の制服だ。

(てことはクラスメイトか。こんな子いたっけ?)

椿と同じく、非の打ち所がない容姿だが、ポーカーフェイスのせいで殆ど感情を読み取れない。

淡々と告げる少女。

「期限は今日まで。深夜零時までには契約を済ませなさい」

「契約つて、宝玉のことか？」

二回目の質問。返ってきたのは沈黙ではなく、きちんとした答え。

「そうよ」

そしてさつきとは打って変わったしゃべり方で話を続ける。

「【ルール・オブ・ジュエル】が始まるのが明日なのに、契約すらしていないなんて自殺志願者なの？」

少女の雰囲気有余りに穏やかになったので、竜牙の口調も僅かにゆるくなる。

「なあ、一つ聞いていいか？【ルール・オブ・ジュエル】ってなんだ？」

その竜牙に、彼を最も傷つける前置きが放たれた。「一つ聞いていい？」

苦しくも前置きは竜牙と同じ言葉。

「あなた……半人前なの？」

「っつ」

空気は一変して、情けなく呻く竜牙。

(か、かなり痛いところをつかれた)

実は、魔術の習得や鍛錬は熱心にやっていたが、一般的な魔術師の知識を記した文献などほんの数ページほどしか読んでいなかった。今日、魔石と宝玉を読んでいたのはたまたまだったりする。

「まあ、いいわ。とにかく絶対に今日中に契約しなさいよ。じゃないとー」

質問の答えは聞けず、おそらく重大であろう話の内容すら分からないまま、現実を引き戻された。

聞き覚えのある声によって。

「おい、起きろ。黒鉄竜牙」



声の主は学校の教師で竜牙のクラス担任・杉原貴志だった。勿論、今は授業中。

「まったく、お前という奴はだらしがないったら……」  
ブツブツ、と呟きながら授業に戻ってゆく。

(珍しいな)

少しだけ、不思議に思った。入学してから約二週間。竜牙が授業中に睡眠(居眠り)をするのは、教師達にとって暗黙の了解とされていた。

おおかた予想がつくが、黒鉄グループから何かしら圧力がかかったのだろう。故に竜牙を起こす教師などいなかった。

担任の杉原もその例外ではなかったのだが――

(って、何考えてんだよ)

先ほどの夢と結びつけるのは考え過ぎだ。

くだらない考えを捨て、久しぶりに先生の話聞く。

さすがに、もう一度眠る気にはなれなかった。

邪魔が入ったと同時に、少女は瞼を開いてベッドから起き上がった。

直後、ドアの開く音と共に届く声。

「失礼致します」

頃合いを見計らい部屋に入ってきたのは、いかにも執事、といった格好の老人だった。

「いかかでございましたか？お嬢様」

「ひいき目を抜いても合格点ね。……ただ、ちょっと予想外だったわ」

返事を聞くためじゃなく、考えている内に自然に出てしまう言葉。「一体どうということかしら？」

「お嬢様？」

「いや、彼は契約をしていない以前に、それそのものを知らないのよ  
一応、校内に魔術師がいるかは調べてあった。なのに、魔力を抑  
えたまま自分の干渉を解除出来るほどの魔術師がいるなんて、全く  
持って予想外だった。」

予想外は仕様がないとして、問題なのは彼が「ルール・オブ・ジ  
ユエル」をしらなかつた事と、宝玉と契約してない事だった。

特に後者は重大問題だ。宝玉と契約を結ばなければ意味がない。  
そして、期限は今日まで。たった一秒でも間に合わなかつたらそ  
こで終わりなのだ。

時計の針は午後四時を示していた。残りは八時間。迷っている暇  
はなかつた。

「……………やっぱり直接会いに行くわ」

「それはなりません！！」

「なっ!?!」

少女は、突然の怒声に驚いた。無理もない。執事が少女に怒声  
をとばすのは、これが初めてだからだ。

少女をまつすぐ見据え、冷静に戻り話を続ける。

「いくらあの少年が未熟とはいえ、契約は自分自身でするもの。お  
嬢様があれば以上干渉するのは魔術師のルールに反します」

「でもっ」

「でもだつてもありません」

少女はムキになつて反対する執事に違和感を感じた。言っている  
ことは正論だが、どこかおかしい。

「何を企んでいるの？」(……………むっ、う)

感づかれたことに少し動揺するが、それは決して顔に出さない。

「何も企んでなどおりませぬ。いくら自分の思い通りにならないと  
わいえ、疑心暗鬼になるのはどうかと思いますな」

「相変わらず嘘をつくのが下手ね」

他人にはバレない執事の嘘も、自分には通用しない。

「あなたは嘘をつく時、まず正論で反対を防ぐ、そして相手の態度を逆手に取る」

パターンを読まれていたのは誤算だったが、ここは戦法を変えればいいだけのことだ。

話をそらすだけでよかったのだ。ただ、その振り方がまずかった。「何をおっしゃいますか。ただ私はお嬢様の身を案じてー」

言葉を遮るがもう遅い。少女は、フツ、と微笑してとどめをさす。「身を案じて、ね。」

(し、し、しまった……)

もう一度制止しようとしたものの、少女は既に窓から飛び降りていた。ちなみにこの部屋は四階だ。

“float on air”(中に浮け)

安易魔術の一つを手早く発動させ、着地寸前で、ふわり、と浮く。込めた魔力は微々たるものなので、すぐに効果はきれた。

「急がなきゃ」

後ろの上の方で、お嬢様ー、と叫ぶ声が聞こえたが無視して学校へ向かった。

キーン、コーン

学校のチャイムが一日の終わりを告げた。一日の終わり、と言ってもあくまで学校の、である。

生徒が一齐に帰り始める。皆がいそいそと帰る様子がよく見える。今はテスト期間中なので部活は休みだ。

(……確かに部活はない。そもそも俺は入ってない。が、何でこんなことやっただよ?)

屋上の唯一綺麗にしてある出口の上。風に飛ばされないよう、筆箱を置いてある大量の紙。三つ四つはあるホッチキスの針が入った箱。針によって資料へと進化させられた紙束。

これだけ揃えば、いやでも何をしているか分かるであろう。普通なら委員がやるような資料作りだ。

もちろん俺は委員じゃないし、資料作りの係でもない。

全てはあいつらの小言から始まった。

**第二話『永き1日の日常編』(後書き)**

かなり遅くなりましたが、第二話です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4769c/>

---

宝玉の魔術師

2010年10月28日07時26分発行